

ピエタ

第二集 二〇二二

三原晶子

神の顔

神の顔の裏には

実は 何もない のかも 知れぬ

銅質の 顔の 裏は

丁度 仮面の裏の ように 何の 色彩も 温もりも ないのかも 知れぬ
あなたが あなたで あって あなたでない 事を

認めたくない 夢心地の わたしに：

この 仮面を 取らずに どうか

この 小さな ふた穴から あなたを 見つめさせて いて欲しい：

あなたの 美しさが あって 初めて
わたしは わたしを超え 輝けるのだから
すべての 人は 塵に 還る：
わたしが 何者 だと 言うのだろうか：
遅い 足取りで 俯きつつ
涙が 流れるのを そのままに：
散り納めの 花弁と 陽光の 中
コロナ禍の マスクと 帽子のつばが
有り難かった

Spring Blossoms

I decided not to see the flowers.

I decided not to see them blossom on the trees.

Even though it's spring anywhere,

I won't put my head up to enjoy them all.

They are for 's hims who're far away, for whom in the place where the spring has
not yet come.

I won't and I'm not able to enjoy flowers alone,
here without having him beside...

The flowers this year doesn't belong to me...

I decided not to see the flowers this year,
unless he comes next to me.

鰻

ああ 鰻よ 鰻や

君を 食らうことの顛末は 何をどうして
これ程 ストレスなのだ…！

クール便で 届く

冷凍の君たちを受け取った日から…

その 苦しみは 始まっている

君たちは やけに 長くて…重ねづらく

食品で 詰まった 冷凍庫 には…

容易には 収まらないので ある

幾つかの 食材を 犠牲に して

我が物顔の 君たちを 押し込み

さあ これを いつ 夕飯に しようかと

母との バトルである…

貴重な物は 特別な日に…と考える 母の前に
私は イライラを 募らせる…

「急がば回れ」^{vs} 「善は急げ…！」

早速 食べよう…！ という 私の

思いは 退けられ…

来る日も 来る日も その時は

やって来ない…

•
•
•

君を 食らう 日の 夕刻は
何にも増して 耐え難く：

今すぐ その 肉厚な 実を 頬張りたいたいという
願いは 苦しめられる：

相撲の 中継から 流れる 拍子木と
場内アナウンスが 空しく 響き渡り：

副菜やら お浸しやら 汁物やらの
ややこしいものを 作り出す 母親の
手元に ジリジリとする

さて 冷凍の 君たちを 湯煎しようにも 大鍋 たつぷりの
湯は なかなか 沸騰しない

並々と 張られた水を ただ じつと 見つめるには：
君は あまりにも 魅惑的だ：

冷凍の 君たちを 最善の 方法で
井ぶりに のせる には
引き上げる 時間に 全ての帳尻を
合わせなければならぬ

熱すぎる 君たちの 封を切るのは
あまりにも 苛立たしい

別にあるタレを 温める手間と
ベタつく手に 耐え忍び

何とも 言えず 少し 縮んだ
白米の上の 君を 前にする：

別にあるタレの 役割は 少なく：
願わくば テーブルの上で
立て掛けた姿を 崩さないでくれ：！

実際に 食した 君より

思い描いた 私の中の 君の 方が

美味しい： という 人生の

からくり：

わたしの中の 鰻よ 永遠なれ：！

近岡 礼

復活

おお 君よ

久しぶりに会ったね

波もおだやかに鳴っている

悠久の大義を水平線に保ち

君はファシズムとは無縁だ

君はどこから来るのか

涯しないウクライナか ロシアか

そんなちっぽけな料簡ではないだろう

おい また来るね

君を忘れていたわけではない

気づかなかっただけなのだ

此処があることを――

復活したのだ

(20220427)

ささやかな物語りを紡ぐ

少し怖いね この波 音
後ろから突き落とさないでくれ
それにしてもこの滔々と打ち寄せる波は
何かを知らせている

冷たかっただろう
怖かっただろう
父よ あの 輸送船が 轟沈する際は

白内障と乱視の眼は
水平線がぼやけている
けれど悠久の様はよくわかる

圧倒せよ 私に関わる妄想の一切を
ピラミッドを見たときの ケニアの大地溝帯を見たときの

茫然自失した自分を笑え

手が冷たい

明後日から五月の

ささやかな物語りを紡ぐこの海原の

腹いっぱいに想いを膨らませて飛ぶ鳥の

どこかぬるい 人間的な

今日の海だった――

(20220428)

予兆

おお お前は轟々と吠えている
吠えるに吠えて
このすさまじい音は何だ
岩礁はけなげにも立っているが
吠えたいものは何か

津波だ
やがて来る予兆を
いまだ聴きとれない
心の底にはバリアーを張り
守りたいもののために凍えている

やがて滅ぶ運命を
今日はしつかりと波は
白い牙をむいて襲いかかる
畳みかけてくる

ここに佇むことになった

昨日の嵐のせいで海は濁っている
今日は無言だねえ

お前は言葉を殺戮する
でも私は言葉にしがみつく
言葉で武装しなければ心が生傷を負う

未知なるものが怖いのだ
それでもお前は諦めずに迫ってくる
無限という物差しで――

水平線の向こうに何があるというのだ
何を隠しているのか
解釈すれば怖れは消える
それでも永遠との接点を私に植えつけようと
水平線はかすかに湾曲して未知へと誘う
それが快く 怖い――

四月末日の風は新緑を含んで身体を揺らす
そして白波は私を責める あとからあとから
この無限運動に乗ることができない
どこに連れていかれるかわからない

永遠は夢であり 希望であり 泪であり
過去の思い出の一切を引っさげて
ここに佇むことになった

(20220430)

グレイをたのしむ

ハザードランプをつけて断崖の細い道に止める

雨が打つ車

茫洋とした水平線

雨滴に煙る

水平線が私を凌駕するマゾの快感

さまざまな生命の限界と無常に眼を覚ます

煙っていても現れてくるもの

水面は重力でゆがむように凹んでいる

岩礁が大観の絵のような描写だ

雨滴がガラス窓を這い

グレイをたのしむ

(20220501)

ドローンと鶯

ドローンを飛ばしている男

やはり私の水平線
おだやかな連休だ
ひたひたと鳴る波の言葉はわからない
単線電車が通る

蜂のようにぶんぶん唸ったドローンは帰る
ノートを持つ私に

「歌を詠まれるんですか」
「失礼します」

と律儀に二言述べて――

どうしてこう穏やかなんだ
私に相応しくない

落着くということの裏に何かありそうで――
平和が保たれるなんてありえない

朽ちてゆく気配がこの中にあるはずだ

酸素が一杯

鶯も鳴いて

さらにはつきり鳴いて

(20220502)

死の間際まで

私を虜にするもの

ここ以外にどこへ行かんとするか

ここは地球ではないか

地球の神秘と秘密を開いてくれるではないか

今日は波音もなく

蟻のようにヨットが放浪している

おっと あれは津波ではないか

水平線に白波が立っているように

見える

見えない

この贅沢

珈琲を飲まなくても

ただ一日に一度ここに来るだけで

たどえてみれば、死の間際まで――

饒舌

もし眼が見えなくなったら
この水平線に縁どられた海原を見ることができない

能登半島が望郷の念を掻き立てる——ここが故郷だというのに……

鶯が背後で下手な口笛を吹いている

私がここで饒舌になるのは
私を超えるものが私を突き出すからである

あの白いモーターボートに乗ってみたい
海原を我が物顔に駆けて

夏に向かって次第に海は温まってゆく
連休間の平日

昨日までの喧騒はない
ただ——水平線は私に何かを考えさせようとする——何かを

(20220506)

透過してくれ

蛙が啼いている
雨が近い

私を凌駕するものと今日も会う

身体に陽があたり熱い

どうか私を透過してくれ
わが身心に堆積した厄介なものたちを――

波の音を聴く
物語るものがあるらしいのだが
わからない

もう少し居たいのだが
三々五々と人がやってくるので――

(20220507)

あとがき

三原さんと話し合い、互いに詩が溜まった時点で「ピエタ」を出すことにしました。

私は詩の書く場所を海原の見える断崖に定めたところ、なにゆえか自然に言葉が紡ぎ出されてくるので、未整理のままの詩日記になりました。

私の半分しかない齡の三原さんですが、老成した詩境を開いているように思われます。

なお、「ピエタ」は今後、金澤詩人賞に登場した人の中から寄稿をお願いし、充実したいと願っています。(礼)

ピエタ 第二集

発行 二〇二三年五月八日

発行者 近岡 礼

発行所 〒九三五〇〇二二一

富山県氷見市朝日本町四番十三号

TEL 〇九〇―三二九八一―六八二一

mimi.7.kei@gmail.com